

クリーミーな泡が新感覚な「スムースレマティー」



百崎 優

京都府出身。1981年2月3日生まれの40歳。九州大学法学部政治学科中退。趣味は読書。スワヌワール合同会社代表として、コンサルティングやアプリ開発のほか、EV充電パッケージや電動シェアバイクを展開。自身もEV、Eバイクを愛用する

## 「茶道」に通じる サステナブルな生き方

地球環境に対する配慮という意味ではこれまでの言葉たちと共通する部分もあり、「決して新しい感覚ではない」と百崎氏。では、一体何が違うのか？それは、「環境のために何かを諦める」から「意識共有のためにコストをかける」ということ。

例えば百崎氏の経営する会社では、名刺から封筒のプラスチックにいたるまで、100%再生紙を使用。「誤解が多いのは再生紙や再利用だから質が悪く、安いだろうという思い込み。実は再生紙の方がコストは高いことも多いが、サステナブルのためには必要だから当然と理解し、再生紙だからこそできるデザインも求めるのが最近の傾向。そういった考えの延長線上に電気自動車などがあり、高コストでも支持されるための理由として多様な機能性開発が進められてきた面もある」と背景を語る。

これはファッションも同様で、レザーなどの動物性素材を使用しないデザインを打ち出す「STELLA McCARTNEY」に代表されるように、サステナブルはハイブランドの潮流となっている。デザイナーや生産地といったファッションの判断基準に、サステナブルという新たなファクターが生まれ、そこにはブ

ランドの理念やストーリーが反映される。それにより、身につける人の人間性や嗜好・考え方を読み解くことができる。それが、「再利用原料・非動物性・廃棄減少など、サステナブルへのアプローチはさまざま。一貫性を持たず、トレンドとしてのサステナブルをつまんだコーヒーネットワークでは面白みを感じない。移動手段にしても身につけるものにしても、自分自身を描くものであり、相手の感性と対話するツール。古来より受け継がれる『茶道』にもつながるもの」と表現する。

茶道は「もてなす」ための用意と同時に、もてなしに応えるために必要な心構えである卒業、つまり招待された側にリテラシーがあることで成立する。そうした意識が根底にあれば、サステナブルな生き方はきつと楽しめる。「自分の利便性だけでなく、地球環境に対して良いものを選ぶ。それは何かを制限するものではなく、技術からのアプローチによって新たな価値に触れたり、新しい表現を発見できる。それが次世代の消費の楽しみ方」。心を豊かに暮らしていくヒントを見つけた気がした。

